

K-761

# 山形市埋蔵文化財調査年報

—平成18年度—

2008

山形市教育委員会

# **山形市埋蔵文化財調査年報**

**－ 平成 18 年度 －**

平成 20 年 3 月

**山形市教育委員会**



## 序

山形市は山形盆地の南部に位置し馬見ヶ崎川や蔵王連峰など水と緑に恵まれた自然豊かな環境にあります。東の奥羽山脈には平安時代以降慈覚大師の開基と伝わる国指定名勝・史跡「山寺」が所在し、市内の中心部には江戸時代の城館跡の国指定史跡「山形城跡」が所在するなど、山形県内はもとより東北の中心的地域として古くから栄えてきました。

市内には、国指定史跡「嶋遺跡」など埋蔵文化財と呼ばれる地中に埋もれた文化財が380箇所以上確認されております。これらの文化財は郷土の歴史や文化を理解する上で欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。

こうした状況のもと近年は市内各所において住民福祉の向上を目的とした各種社会基盤整備に関する開発事業が随時進められております。埋蔵文化財保護の観点から、それら開発事業の前には埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が行われ、その結果をうけて開発事業と埋蔵文化財保護との調整を行っているところです。また国指定史跡「山形城跡」などの保存や整備を目的とした発掘調査も継続されております。

本書は、平成18年度に実施された発掘調査及び試掘調査の概要をまとめたものです。埋蔵文化財の保護と啓蒙のために、そして皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき発掘調査に多大なご協力をいただきました事業者や工事関係者の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年12月

山形市教育委員会

教育長 大場 登



## 例　　言

- 1 本書は平成18年度に山形市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査を総括したものである。
- 2 表面踏査・試掘調査・立会調査については本書をもって報告とし、発掘調査については今後報告書を作成する予定のあるものについては略述するにとどめた。また既に報告書が刊行されているものについては割愛した。
- 3 本書の作成・執筆は、五十嵐貴久・須藤英之・國井修が担当した。編集は國井修が担当した。
- 4 出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会が一括保管している。

## 凡　　例

- 1 本書で使用した地形図等は以下の通りである。  
第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図「山形北部」(NJ-54-21-11-3)・「山形南部」(NJ-54-21-11-4) を 1:75,000に縮小。
- 2 第5図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 67-2 (山形広域都市計画図「漆房」) を 1:5,000に縮小。
- 3 第6図 山形市発行 1:10,000「山形広域都市計画図 7」
- 4 遺構番号は現地調査段階での番号を踏襲している。
- 5 遺跡概要図・遺構配置図中の方針は原則として座標北を示しているが、一部任意のものがある。
- 6 遺構実測図中の標高は海拔を基準とする。

## 目 次

I 埋蔵文化財保護の動向	
1 平成18年度の調査概況	..... (國井修) ..... 1
II 調査の概要	
1 史跡 山形城跡	..... (五十嵐貴久) ..... 6
2 試掘調査・立会調査	..... (須藤英之・國井修) ..... 13
(1) 山形城三の丸跡	(3) 成沢城跡
(2) 長谷堂城跡	
付編 平成18年度 山形市出土金属製品保存処理業務委託事業	..... 16

## 表

表1 平成18年度埋蔵文化財調査一覧	..... 3	表3 新規登録・変更遺跡一覧	..... 5
表2 埋蔵文化財発掘調査報告書一覧	..... 5		

## 挿 図

第1図 調査地点位置図	..... 2	第4図 都市計画道路美畑天童線(幸町工区)	
第2図 史跡山形城跡		試掘調査概要図	..... 13
平成18年度発掘調査位置図	..... 11	第5図 長谷堂城跡調査概要図	..... 14
第3図 本丸南土壘地区平面図及び同地区出土 金箔押山文軒丸瓦実測図	..... 12	第6図 成沢城跡調査概要図	..... 15

## 第Ⅰ章 埋蔵文化財保護の動向

### 1 平成18年度の調査概況

平成18年度は、3件の発掘調査、12件の試掘調査、5件の立会調査を実施した。実施した調査の一覧を表1に示した。

発掘調査では、国指定史跡山形城の整備事業に伴う発掘調査、国指定史跡嶋遺跡の範囲確認調査、大型店舗建設に係る梅野木前1遺跡の緊急発掘調査を実施した。

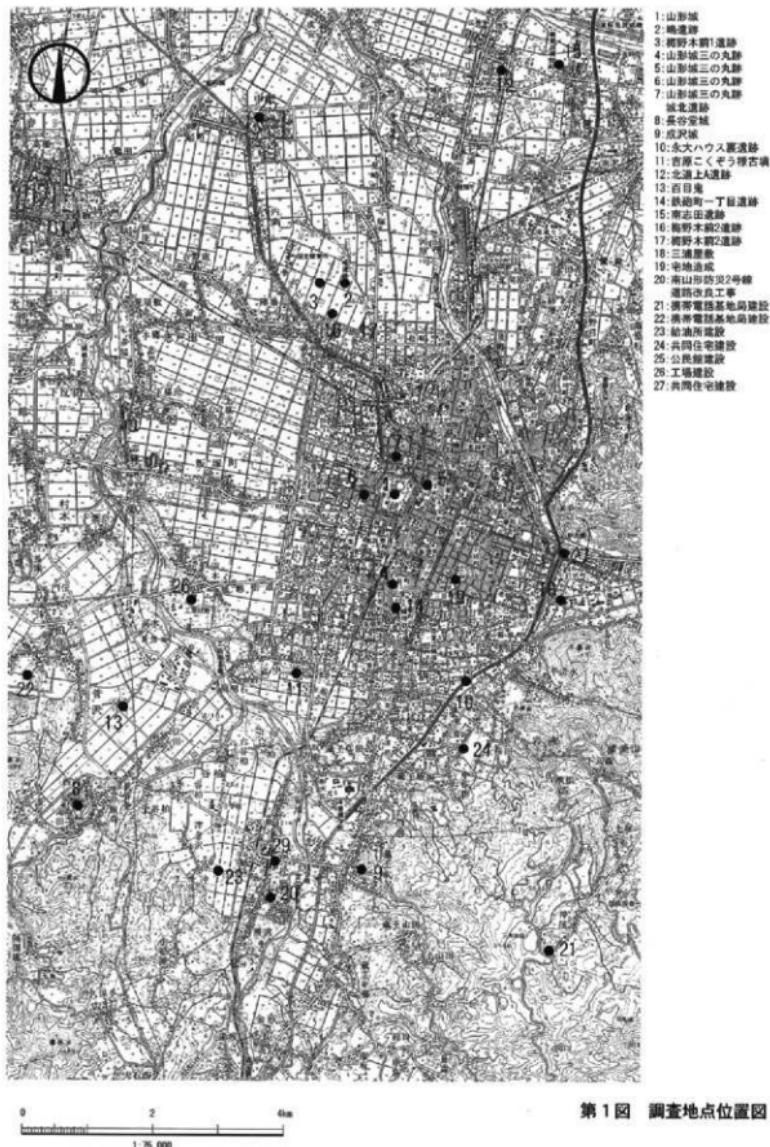
試掘調査では、市道拡幅、宅地造成及び共同住宅建設等に伴う調査を実施した。いずれの調査でも遺跡は確認されなかった。

立会調査では、公園整備事業に伴い長谷堂城及び成沢城、共同住宅建設に係り山形城三の丸跡、永大ハウス裏遺跡、鉄砲町一丁目遺跡の調査を実施した。いずれの調査でも遺構面に工事が達しないか、もしくは掘削範囲が狭小で、埋蔵文化財への影響は軽微であった。

整理作業では上記の山形城跡の整理作業をこれまでと継続して行ったほか、梅野木前1遺跡の整理作業を平成19年度にかけて実施した。梅野木前1遺跡については平成19年度前半に報告書を刊行した。

平成18年度における民間開発に係る事業調整では、民間による埋蔵文化財の照会が延べ506件あり、前年度に比べ33%の増加にある。そのうち開発事業に係るもののが220件あり、その大半は個人住宅建設、共同住宅建設及び携帯電話基地局建設に係るものである。事業規模等から試掘調査などの調査を実施したものは9件で主に中高層の共同住宅に係るものである。木造の共同住宅建築や携帯電話基地局建設に係る調整では、事業規模から不時発見時の際の手続きの説明や慎重工事としているものが多い。

なお、これまで本市で刊行した埋蔵文化財発掘調査報告書は表2の通りである。また、遺跡の新規発見については表3の通りである。



第1図 調査地点位置図

表1 平成18年度埋蔵文化財調査一覧

No.	遺跡名	調査地	事業名	調査区分	県遺跡番号 (中世城跡 遺跡番号)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	担当者	備考
1	山形城	霞城町3他	史跡山形城跡 本丸大手門復元整備事業	発掘調査	1 (201-001)	2006/7/20~ 12/28 2007/2/22~ 3/30	2,250	五十嵐貴久 高橋 拓 橋口 有美	国指定史跡
2	島	大字島	重要遺跡範囲 確認	発掘調査	4	2006/7/18~ 11/30	800	國井 英之 須藤 桶口 有美 安達 未来奈	国指定史跡。 調査地点については指定地外。
3	梅野木前 1	大字梅野木 前	大型店舗建設 事業	立会調査	平成3年度 新規	2006/8/31 2006/9/1		須藤 英之	
				発掘調査		2006/10/26~ 12/28	2,803	須藤 國井 桶口 有美 安達 未来奈	
4	山形城 三の丸	幸町	都市計画道路 美畑町天童線 舗装工事	試掘調査	平成7年度 新規 (201-003)	2007/1/17		須藤 國井 桶口 有美 安達 未来奈	調査地点については埋蔵文化財は既に損壊。
5	山形城 三の丸	大手町	共同住宅建設	立会調査	平成7年度 新規 (201-003)	2006/12/14		齋藤 仁	掘削は遺跡に達しない。
6	山形城 三の丸	城西町二丁目	個人住宅建設	慎重工事	平成7年度 新規 (201-003)				
7	山形城 三の丸 城北	城北町二丁目	山形市立第七 小学校校舎改築工事	慎重工事	平成7年度 新規 (201-003) 平成17年度 新規				平成18・19年度 工事実施部分について、埋蔵文化財は既に損壊。
8	長谷堂城	大字長谷堂 字城山	公園造成	立会調査	104 (201-011)	2006/9/28~30 2006/11/10 2006/11/13 2006/11/16		齋藤 仁	軽微な工事。 遺物確認されず。
9	成沢城	藏王成沢字 船山	公園造成	立会調査	63 (201-014)	2006/10/20 2006/11/21 2006/12/5 2007/3/9 2007/3/30		齋藤 須藤 國井 英之 修	軽微な工事。 遺物確認されず。
10	永井大 ハウス裏	小立	共同住宅建設	立会調査	45	2006/8/3~4 2006/8/21		齋藤 仁	掘削範囲は貸 小、遺構・遺物 確認できず。
11	吉原 こくそう 様古墳	大字吉原	駐車場造成	立会調査	平成18年度 新規	2006/9/8		齋藤 仁	周溝らしき落ち込みは確認したが、確定は出来ず。
12	北道上A	大字漆山	宅地造成	試掘調査	162	2006/10/6		齋藤 仁	事業区域について、埋蔵文化財は既に損壊。遺跡の範囲変更。
13	百鬼	大字百鬼	温泉施設建設	試掘調査	113	2006/8/17		齋藤 仁	事業地内まで埋蔵文化財を包蔵地は広がらない。遺跡の範囲変更。
14	鐵砲町 一丁目	鉄砲町一丁目	共同住宅建設	立会調査	平成17年度 新規	2006/4/17~20		須藤 桶口 英之 有美	上下水管路設工事部分。
15	南志田	大字漆山	個人住宅建設	慎重工事	平成14年度 新規				掘削は遺跡に達しない。
16	梅野木前 2	大字梅野木 前	個人住宅建設	慎重工事	平成3年度 新規				軽微な工事。
17	梅野木前 2	大字梅野木 前	個人住宅建設	慎重工事	平成3年度 新規				軽微な工事。

No.	遺跡名	調査地	事業名	調査区分	県遺跡番号 (中世城館 遺跡番号)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	担当者	備考
18	三浦屋敷	松波二丁目	個人住宅建設	慎重工事	12 (201-022)				軽微な工事。
19		三日町一丁目	宅地造成	試掘調査		2006/9/22		齋藤 仁	埋蔵文化財は所在しない。
20		大字松原	南山形防災2 号線道路改良 工事	試掘調査		2006/9/25		齋藤 仁	磨滅した土師器 が出土するも明確な遺構確認できず。埋蔵文化財は所在しない。
21		大字神尾	携帯電話基地 局建設	試掘調査		2006/9/26		齋藤 仁	埋蔵文化財は所在しない。
22		大字柏倉	携帯電話基地 局建設	試掘調査		2006/9/26		齋藤 仁	「中林古墳群」 (県遺跡番号昭 和59年新規)、西 側。埋蔵文化財は 所在しない。
23		大字松原	給油所建設	試掘調査		2006/10/4		齋藤 仁	埋蔵文化財は所在しない。
24		大字中板田	共同住宅建設	試掘調査		2006/10/10		齋藤 仁	埋蔵文化財は所在しない。
25		大字中野	公民館建設	試掘調査		2007/2/9		須藤 國井 安達 英之 修 未奈	「中野城」(県遺 跡番号139)隣接。 遺構・遺物確認出来ず。 埋蔵文化財は所在 しない。
26		大字沼本	工場建設	試掘調査		2007/2/13		國井 須藤 安達 英之 修 未奈	微量の遺物が出土するも、明確な遺構確認できず。 周辺に包蔵地が所在する可能性が高い。 調査対象地には埋蔵文化財は所在しない。
27		小白川三丁目	共同住宅建設	試掘調査		2007/3/5		須藤 國井 安達 英之 修 未奈	埋蔵文化財は所在しない。

表2 埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

集番号	報告書名	発行年月日	発行機関	備考
1	熊ノ前遺跡第1次発掘調査報告書	1975/5	山形市教育委員会	
2	熊ノ前遺跡第3次発掘調査報告書	1978/11	山形市教育委員会	
3	山形城跡発掘調査報告書	1981/3	山形市教育委員会	本丸及び二の丸部分
4	音沢二号墳発掘調査報告書	1987	山形市教育委員会	
5	音沢2号墳	1991	山形市教育委員会	
6	鳴遺跡発掘調査概報	1994	山形市教育委員会	範囲確認調査の報告
7	馬上台遺跡発掘調査報告書	1995/3	山形市教育委員会	
8	山形城本丸発掘調査概報	1996/3	山形市教育委員会	平成6・7年度調査概報
9	中野目I遺跡中野目II遺跡発掘調査報告書	2001/3/31	特殊法人日本労働者住宅協会 山形労働者住宅生活協同組合 山形市教育委員会	
10	吉原I遺跡発掘調査報告書	2001/3/31	株式会社カワチ薬品 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
11	吉原III遺跡発掘調査報告書	2001/3/31	株式会社東北ケイズ電気 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
12	一ノ坪遺跡発掘調査報告書	2001/11/30	山形市教育委員会	
13	山武考古学研究所	2002/3/31	東北ミサワホーク 松田建設株式会社山形市教育委員会	
14	石田遺跡上谷柏遺跡発掘調査報告書	2002/6/30	東北電力株式会社 東山形市教育委員会	
15	山形城三の丸跡(山形市立第一小学校敷地内)発掘調査報告書	2003/3/31	山形市教育委員会	
16	吉原II遺跡第3次発掘調査報告書	2003/3/31	株式会社二ラク 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
17	双葉町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書 近世編	2004/3/31	山形市教育委員会	
18	山形西高教地内遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	山形市教育委員会	
19	吉原遺跡群発掘調査報告書	2004/3/31	吉原土地区画整理組合 山形市教育委員会	吉原土地区画整理事業に伴う調査報告書
20	観音寺遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	芸工大前土地区画整理組合 山形市教育委員会	
21	成沢西遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	成沢土地区画整理組合 山形市教育委員会	
22	河原田遺跡・梅野木前2遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	鶴土地区画整理組合 山形市教育委員会	
23	南志田遺跡発掘調査報告書	2005/3/31	東南タクシーブル 山形市教育委員会	
24	双葉町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書 銀文時代～中世編	2005/3/31	山形市教育委員会	
25	双葉町遺跡城南町南城南町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書	2006/3/31	山形市教育委員会	
26	梅野木前1遺跡発掘調査報告書	2006/3/31	山形市教育委員会	
27	北向遺跡発掘調査報告書	2006/3/31	山形市教育委員会	
28	梅野木前1遺跡発掘調査報告書	2007/7/31	株式会社しまむら会 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
29	鳴遺跡範囲確認調査報告書	2008/3/31	山形市教育委員会	重要遺跡範囲確認

表3 新規登録・変更遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺跡番号	変更内容	1:25000地形図	地形図番号	備考
吉原ごくそら様 古	大字吉原	平成18年度新規	新規発見	山形南部	NJ-54-21-11-4	
北道上A	大字深山	162	範囲の変更	山形南部	NJ-54-21-11-4	旧称「深山古跡」。 深山沃土跡の初調査。
百目鬼	大字百目鬼	113	範囲の変更	山形南部	NJ-54-21-11-4	

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1 史跡 山形城跡

#### (1) 調査要項

遺跡番号 県遺跡番号1 遺跡略号 KJO

所在地 山形市霞城町3番地（霞城公園）

調査原因 史跡整備事業 調査面積 2,250m<sup>2</sup>

調査期間 2006/7/20～12/28, 2007/2/22～3/30

調査担当者 五十嵐貴久 調査補助員 高橋 拓

#### (2) 調査の経緯

山形城跡は、昭和61（1986）年に国史跡指定を受け、平成3（1991）年には「二の丸東大手門」の復原が完了した。その後、整備事業計画に基づき本丸整備の基礎資料を得る目的で、本丸北堀・西堀の一部発掘調査が進められてきた（武田1996『山形城跡本丸堀発掘調査概報』山形市教育委員会）。平成8年から15年までは本丸大手門周辺の発掘調査を実施（石垣復原工事は平成10年から15年）し、継続して本丸堀跡・土塁の調査及び復原事業を進めている。平成18年度は本丸（東・南）堀跡・土塁跡の発掘調査を実施した（第2図参照）。

#### (3) 遺跡の概観

山形城跡は巣王山系を源とする馬見ヶ崎川扇状地の扇端部湧水帯にあり、市街地のほぼ中央に位置する。南北朝期の延文2（1356）年、足利一門の斯波氏により築かれたと伝わる。初代城主は斯波兼頼で後に最上氏を名乗り第11代最上義光の文禄・慶長期（1592-1614年）に最大57万石の領国を支配し、三の丸までの輪郭式の城と城下町の町割りを築いたと言われている。その後、元和8（1622）年鳥居氏が入部の頃に本丸・二の丸内を改修したと伝えられ、現在の二の丸の形に整えられた。城跡は馬見ヶ崎川の氾濫による砂礫層を基盤とした平地に立地しており、氾濫等による河川砂と腐植質土層との互層状の堆積層が上位に存在し、下層は砂礫層が厚さ約4m以上堆積する状態で、本丸堀の法面（側面）を支持するのもこの砂礫層である。二の丸は周囲の堀・土塁が現況で遺るほか、虎口部分のみ石垣を用いた様式は比較的良好に保存されている。しかし、郭内は現在文化・体育施設等が配備され、特に本丸堀・土塁は明治時代に旧陸軍の兵営地になる際、破壊され現存しない。史跡指定以後、山形市が主体となり発掘調査並びに復原工事を進め、近世山形城の姿が復原されつつある。

#### (4) 検出された遺構と遺物

範囲は「本丸東堀・東土塁地区」・「本丸南堀・南土塁地区」と呼ぶ。以下詳述する。

**本丸東堀・東土塁地区（850m<sup>2</sup>）：**本地区は、土塁法面部分調査を主とする堀跡（250m<sup>2</sup>）と、本丸東土塁直下の平坦面（600m<sup>2</sup>）に分割する。法面部分の調査は、本丸東土塁復原工事に先立ち行った調査で、東土塁中段石積造構の延（北）伸部分の確認と、東土塁裾部分に厚く堆積する遺物（崩落）包含層の採集、土塁法尻部分の「護岸石垣」延（北）伸部分確認の目的で実施した。中段石積造構は未調査の

長さ20mの範囲の調査で、連続して検出された。BP-33・34グリッドでは、石積みの基底面にⅡb層と認定される黒褐色砂質土が堆積しており、この堆積土中より青磁碗・かわらけが出土した。青磁碗は口縁部全周が破損し体部・高台が窺える資料で、龍泉窯系の16C代と推定される。かわらけは輪轆成形・回転糸切底をもつもので、底径約75mm・器高約30mmの中型で、山形城内で比較的多く出土しているものと同型である。現在まで、この遺構周辺より近世以降の遺物が出土していないことから、少なくとも遺構構築の下限を示す資料として捉えている。その他、調査範囲の中央部にあたるBP-34グリッド杭位置あたりを境界として、南北両石積遺構がやや傾斜する特徴が認められた。また、主にBP-33グリッド範囲の石積みは比較的粗く、やや大型の扁平礫を横長軸で使用するものの縦位置で供するため、土圧等により傾くなど、安定性に欠ける状況を呈していた。この部位は後に何らかの手が加わっている可能性が高いと考えられる。護岸石垣は前年度調査位置の北側に連続する長さ50mの範囲で、遺物包含層は同様な状況で分布していた(『年報』2007山形市教委参照)。原則として良好な包含層を形成する部分の背面には護岸石垣の残存率が高く、良好でない範囲では石垣も崩壊している割合が高かった。良好な範囲では石垣の天端を確認し、堀底よりおよそ1mの高さまで積んでいた。石材は殆どが拳大から人頭大の河原石で最下位には比較的規模の大きな石材をあてがっていた。本年度調査範囲で確認した特徴は、使用している自然石の配置傾向にある。基本的に割加工は行わず野面であるが、比較的方形規格で扁平面が現れる石材を選択しているうえ、最下位の石列では、扁平面を前面として使用し、石垣法面を平坦面で構成しようとする意識が窺えたことである。そのほか、BQ-33・34グリッドでは前列に相当する護岸石垣の後背側に旧時期の護岸石垣が存在することが判った。また、その部分では、前列の石垣と後背の石垣との間に若干の間隔があり、木杭列が確認された。杭は直径約8cm前後の丸杭であり、15~30cmの間隔で打たれていた。2重の石垣が分布する範囲に応じて杭列も発見されていることから、前列の石垣普請に関する土木工事の痕跡と捉えている。何らかの理由で後背の石垣に対して補修を行ったものと推測する。後背の石垣は上部の一部のみ確認したが、基本的に前列同様河原自然石による野面石垣である。但し、現存する部分の最上部は、堀底から120cmほどの高さで、背面の地山砂礫に貼りつく形で円弧を描くように若干小段を呈するよう形成されていた。また、前列の石垣も南側から続く現存の護岸石垣の様相と差異は認められず、この普請は時間的間隔がないなかで行われたものと推測する。今年度は相対的な時間差をしめす遺構に恵まれたものの、石垣の構築時期等を示す共伴遺物はなく、遺物等から構築初期の年代推定は困難である。

土塁直下の平坦部の調査は、平成14年度調査区の北側に拡張した範囲で行った。調査の目的は、本丸郭の遺構確認面(旧地表)の検出と、それに伴い土塁堆積層の本丸側法尻の残存状況を確認することである。調査の結果、旧地表面は明治時代以降の削平で調査範囲においては残存しないことが判った。従って、土塁法尻の位置あるいは基底面層は不明である。明治時代以降の削平直下には、黒褐色砂質土(Ⅱ層)を主体とした遺物包含層の広がりを検出し、その面において石列遺構を3基確認した。各遺構は基軸を異にし同時期とは捉えがたい。そのうち一つSR06035は土塁・堀跡と基軸を一にし、南北に延伸する2列の石列に蓋石がのる暗渠状遺構であった。石列は溝状の遺構痕跡が認められず周囲

の整地時期に並行的に築かれたものと考えている。ただし、構築時期を示す明確な遺物の共伴関係は認められなかった。また、堆積土層確認の目的で実施したトレンチでは、東西方向に分布する3基の井戸跡も確認した。そのうちの一つSE07005は、造構確認面からの深さ約2.3mあり、底部には約0.9m四方の周囲より若干低い底面があってその四隅には丸杭跡が残っていた。従って、木枠を備えた井戸であった。枠板及び杭は現存せず、底部からの出土遺物もないため構築年代については不明であるが、埋土上位より陶器片が出土しており、廃絶時期の下限は中世（戦国期）と推定する。また、他の2基も構築時期を示す遺物に乏しいため時期不詳であるが、石組枠を用いていない共通点が指摘でき、過年度出土井戸跡がすべて石組井戸であることと対照的である。

**本丸南堀・南土塁地区（1400m<sup>2</sup>）：**本地区は、本丸南土塁直下の平坦面（700m<sup>2</sup>）と、土塁法面部分調査も含む堀跡（700m<sup>2</sup>）に分割する。前者は平成15年度調査区の西側に拡張した範囲で行った（第3図参照）。調査は本丸郭の造構確認面（旧地表）の検出と、それに伴い土塁堆積層の本丸側法尻及びそれに類する造構の残存状況確認の目的で実施した。その結果、調査区北端では旧地表面に関する示唆に富む堆積層を確認するとともに、土塁内法（本丸郭側）に関連性が高い石列・石積造構を検出した。明治時代以降の擾乱層直下には黒褐色砂質土（II層）を主体とした遺物包含層を確認した。トレンチ調査による断面観察の結果同層は東西方向に主軸を持つ土手状造構であることが判明し、かつ同造構を構成する互層状堆積層はそのまま土塁法面形成層の基底面まで連続する堆積層であることを確認した。この堆積層は、後述する土塁中段石積造構の後背部に相当し、一体性を有することが明らかになった。

また、土手状造構の北側には、集石あるいは石列・石積造構が検出された。本造構は東西方向に基軸をもつ数条の石列・石積造構をベースとして成立しているが、その様相は新旧數度にわたる重複痕と捉えられる。その範囲は南北方向で約3mに収まる帶状造構群であるとともに、石列帯を境に南北で堆積層序に差異が認められることから、同造構は土塁法尻部境界に関連する可能性が高いと考えられる。石列は人頭大の河原石を長輪横組の単列あるいは2段の石積みとなる部分や、石垣平石程度の大きさの玉石を配置した部分などヴァリエーションに富み、一部には石列に対して蓋石状に被さる石があり、暗渠を推測させるが全体としての機能等は詳細不明である。西方に延伸するため今後の調査により解明を期待したい。BD-43グリッドの同造構周辺埋土より「金箔押山文軒丸瓦」瓦当部分が出土した。周縁帯と文様帯中心の「山」陽文に金箔が付着している。平成15年度に同地区隣接区より軒平金箔瓦が出土しており、同時期の遺物と考えられる。「山」文瓦の出土は本丸域からは少なく、かつ土塁直下層からの出土など造構との時期差により最上氏時代の可能性が高いと考えられてきた。金箔瓦であることからその可能性は極めて高くなるとともに、中央（豊臣・徳川）政権から下賜された様式で現時点では南奥羽が北限であることから、山形城が担う重要度を示すものといえよう。

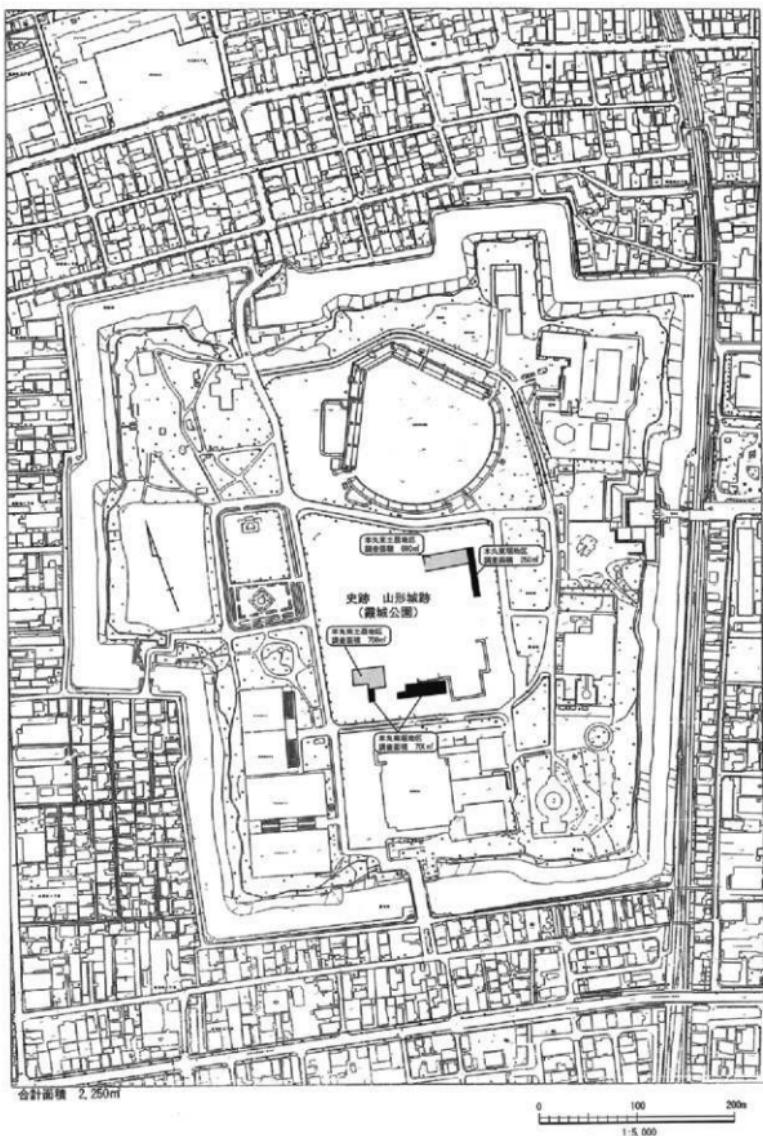
本丸南土塁法面部分の調査は過年度把握していた土塁中段石積造構の詳細と、東土塁裾部で検出した「護岸石垣」と同種造構の存在の有無確認が目的であった。中段石積は平成16年度に確認した範囲の西方約5m（BE-45グリッド西半）で延伸部分を確認した。その範囲は2段の石積みとなっており、安山岩の玉石を基本とし角礫が混在する構成となっていた。割石もしくは人為的な石割は認められ

ず、後背部には栗石相当の玉砂利が埋土中に存在する。先述した互層状堆積層はこの栗石をも内包し、石積造構構築と土手状造構は並行時に構築されたことを裏付けている。石積みの石材は長軸方向を横向きにして配置している特徴をもつものが多く、この様式は東土壠と同様である。従って控え方向の石の厚みがなく不安定であるうえ、中には控え長よりも前面の高さ長が長い縱置き（扁平石を立てていている）ものが散見される。また、2段構成の部分とそれ以東の単列部分とは様相を若干異にしており、構築時期の差異を示す可能性があるが遺物共伴が皆無であり詳細不明である。護岸石垣は、トレンチ調査により調査範囲の東西端点にて確認された。玉石による石積みで、高さは堀底から約1.2mであった。裏込め層を持たず、後背の砂礫層に直積みしていた。石垣直前の堀内には東土壠に顕著であった崩落瓦堆積層は認められず、植物質腐植土層（Hu層）・堀内堆積土層（H5層）は同様に堆積していた。護岸石垣の調査は、中段石積造構との関連と東土壠調査成果からの推測により行われた。中段石積造構が形成される部分にはテラス状地形が存在する。東土壠の場合はそのテラスがごく限定され切岸により護岸石垣へと連属する法面を形成していたが、南土壠はそのテラスが西伸するに従い広くなる状況が確認された。中段石積はその前面も黒褐色互層堆積により覆われていたことが断面観察により明らかであるが、その前面には基本層IV層に相当する黄褐色砂礫層由來の再堆積層が覆っていた。その前面に相当する部分で護岸石垣が発見された。しかも、土壠中段石積造構の基軸と南土壠護岸石垣との基軸には差異が認められ、西方に延伸することで両者は広がる位置関係を示していた。この基軸は護岸石垣の場合、本丸一文字門石垣の基軸と概ね合致することから、本調査区における土壠構築の推移は、旧時期の造構群（中段石積造構・土手状造構）にIV層由來の砂礫層を被せ土壠構成層とし、本丸一文字門に連続する施設として南土壠が形成されたことを示すと仮定される。その他、南堀内の調査では、本丸一文字門西側櫓台石垣及び折形西面等に由来する崩落石垣集中埋没地点を確認した。これらは、堀の機能が終焉を迎える幕末から明治中期までの堆積層よりも下位に位置し、石垣復原工事の際に採取した堀内転石とは、崩落原因・時期を異にすることが明確である。しかも、石垣はいずれもHu層を最上層とする近世期堀内堆積土に覆われており、崩落した後一定の時間経過を経て堀内に残存したものと考えられる。石垣崩壊をしめす明確な史実を確認するには至らないが、18C後半より城主となる秋元氏時代の絵図には、西側櫓台周辺が崩壊したことを示す表記があり、その状況を伝える事実として重要な現象と捉えている。

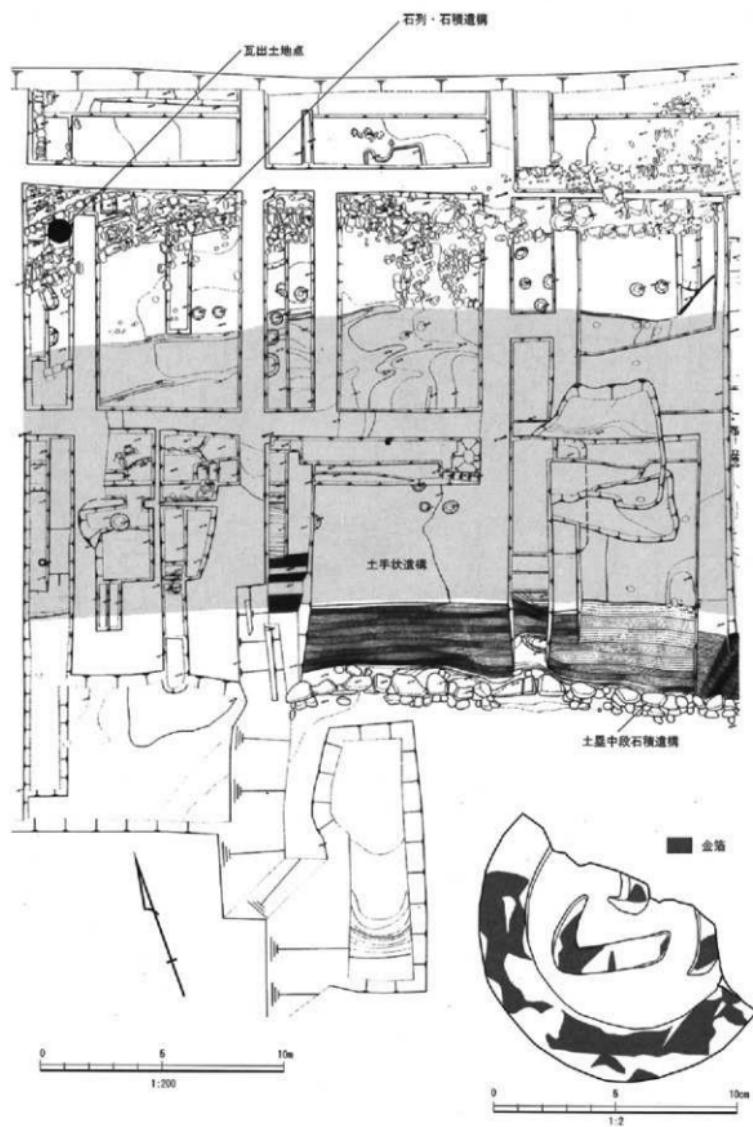
#### (5) まとめ

平成18年度の調査は、東堀・東土壠地区と南堀・南土壠地区の相互比較により調査成果を考察できることの意義は大きかった。特に、積年の課題である土壠関連造構群（土壠中段石積造構・護岸石垣等）の構築時期・目的等に関する新発見は、山形城の解明に有効であった。土壠中段石積造構と護岸石垣の基軸に差異が認められることは、東土壠跡調査時にやや認められていた点であるが、南土壠跡における明らかな差異は、両者が同時期の構築物でないことを証明している。ただし、中段石積造構は東・南両地点とも共通点も多く、構築レベルがほぼ一定（平行）であることや、構成する石材の配置方法（長軸横向き配置）・後背面を形成する黒褐色人為堆積土と石積み直上埋土との共通性から、少

なくとも両者は共通の目的により形成された構造物であることが証明され、それは絵図にのこる本丸城を区画する要素であるといえよう。従って、これらは本丸一文字門石垣をはじめとする江戸時代前期に出現する山形城（「正保絵図」に登場する山形城の姿）への改修により埋没した遺構群であり、最上氏時代の遺構である可能性が非常に高くなつたと考えている。一方、南土塁裾部に護岸石垣を確認できたことの意義は大きく、土塁の位置を確認するうえで指標となる遺構である。次年度以降、継続的な調査により詳細を明らかにする予定である。



第2図 史跡山形城跡 平成18年度発掘調査位置図



第3図 本丸南土塁地区平面図及び同地区出土金箔押山文軒九瓦実測図

## 2 試掘調査・立会調査

### (1) 山形城三の丸跡

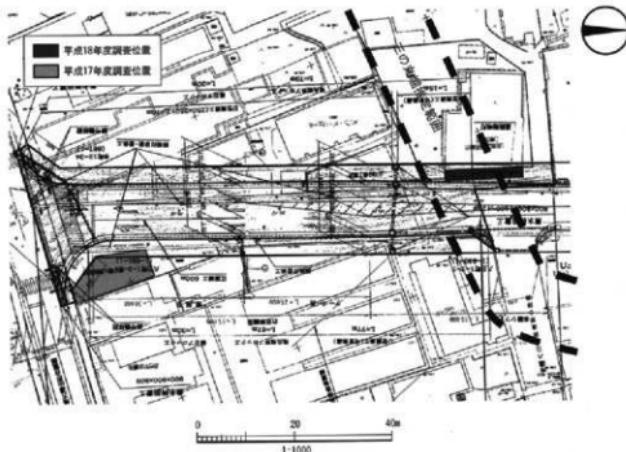
#### 【都市計画道路美畠町天童線舗装工事】

調査区域は、山形城三の丸堀跡の推定部分となる。平成17年度に実施した箇所（今回の調査区域東側に近接）敷地における立会調査では、表土下約1mで堀の堆積土と南端の立ち上がりを確認している。事業区域北端部において表土下約2mまで掘削したが建築廃材や埋立土と推定される砂礫が確認されたのみで堀跡の堆積土は確認されなかった。また掘削土からは江戸時代まで遡り得る遺物は全く出土しなかった。なお壁面が崩落し現道を損壊する危険性があったため2m以上の掘削を取り止めている。平成17年度に標記事業に関連して実施した2箇所の立会調査では北側では堀跡の南端部が確認されたものの、南側においては埋蔵文化財は確認されなかった。よってトレンチ以南の工事区域については山形城三の丸跡の範囲から外れ、かつ埋蔵文化財は所在しないと判断される。

以上の調査結果から、調査区域内にはかつて山形城三の丸堀が存在していたと推定されるが、過去の開発等により損壊したと判断される。

#### 【共同住宅建築】

基礎掘削時に立会調査を行ったが、遺構・遺物ともに確認されなかった。



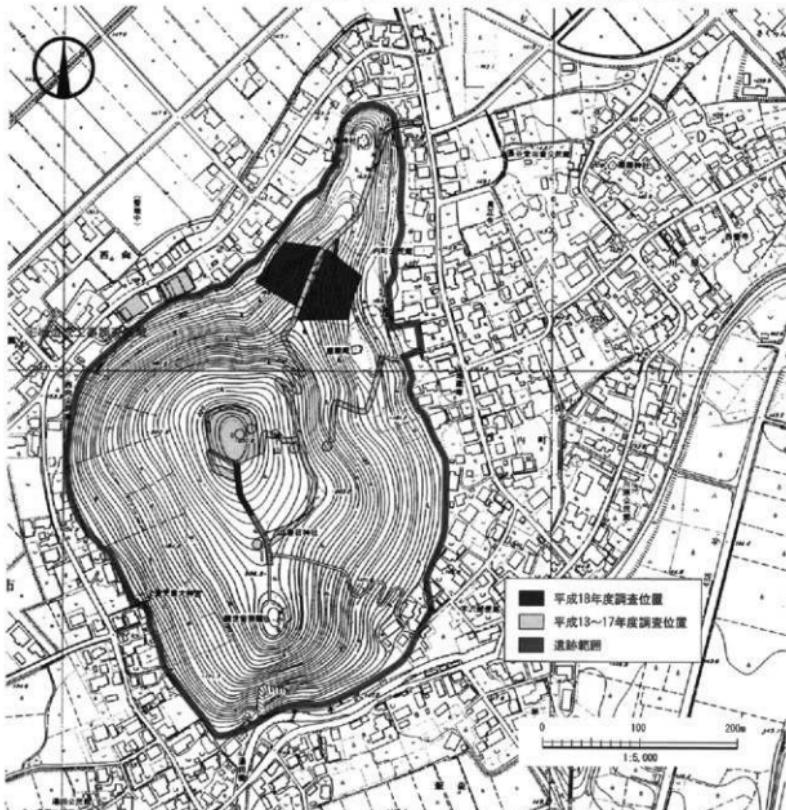
第4図 都市計画道路美畠町天童線（幸町工区）試掘調査概要図

## (2) 長谷堂城跡

長谷堂城は、山形市の南西部、大字本沢地区に位置する標高約200mの独立丘を利用して築城されている。慶長5年（1600）の出羽合戦において、最上義光と直江兼続率いる上杉軍の戦闘の場として文献記録に記載されている城館として著名である。往時は丘の周囲を土塁及び水濠が囲んでいたと伝えられている。城郭の平面規模は南北450m・東西350mの広さに及ぶ。

現在山形市都市開発部公園緑地課が主体となり、市民の地域公園として活用を図ることを目的とした公園整備事業が進められている。これらの整備に伴い、遊歩道整備、桜の植樹及び既存遊歩道への手摺設置が行われることとなった。いずれも工事実施面積が狭小なため工事の進捗に合わせて立会調査を実施した。

各工事箇所において掘削時に立会を行ったが、いずれの箇所からも遺構・遺物は確認されなかった。工事による掘削も軽微なもので、埋蔵文化財に対する影響は殆どないと判断された。

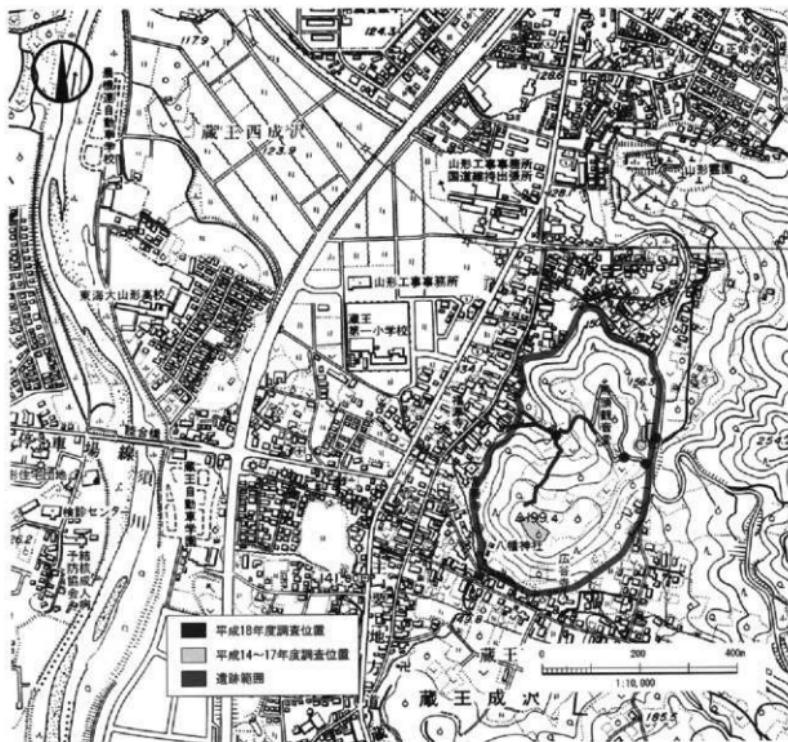


### (3) 成沢城跡

成沢城は、山形市の南東部蔵王成沢地区に所在し、標高約200mの奥羽山脈裾野に立地している。城の西侧を鳴沢川が流れ、現在も部分的に土塁や虎口が残存している。城郭の平面規模は、南北580m・東西350mの広さに及ぶ。

現在山形市都市開発部公園緑地課が主体となり、市民の憩いと集いの場として活用を図ることを目的とした公園整備事業が進められている。これらの整備に伴い、遊歩道造成、遊歩道疑木設置、水路切替工及び案内看板設置工事が行われることになった。いずれも掘削工事の実施面積が狭小なことから工事の進捗に合わせて立会調査を実施した。

各工事箇所において掘削時に立会を行ったが、いずれの箇所からも遺構・遺物は確認されなかった。また、工事による掘削も軽微なもので、埋蔵文化財に対する影響はほとんどないと判断された。



第6図 成沢城跡調査概要図

## 付録 平成18年度 山形市出土金属製品保存処理業務委託事業

山形市教育委員会では、これまで、未実施であった双葉町遺跡・城南町遺跡（山形城三の丸跡）出土の金属製品の一部について保存処理を実施した。

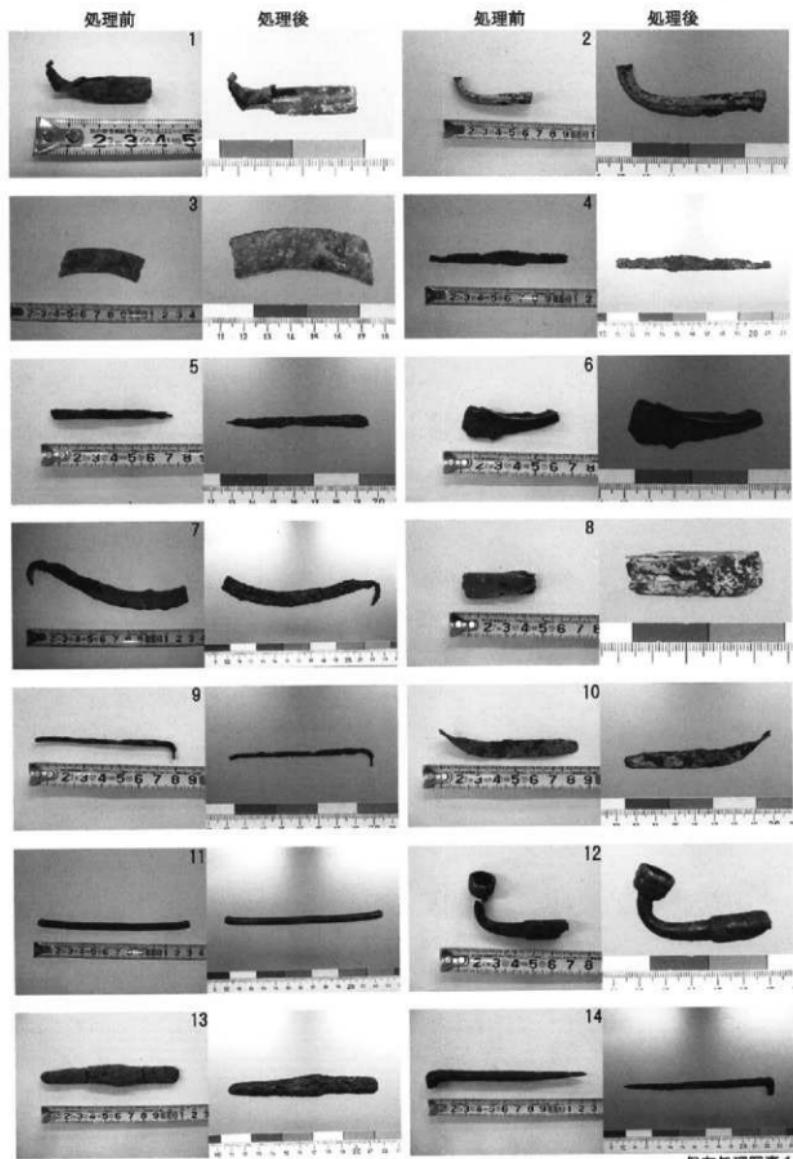
保存処理業務は財団法人山梨文化財研究所に委託し、委託期間は平成18年1月15日～平成19年3月31日である。

以下、処理対象とした遺物一覧を示し、処理前及び処理状況写真を掲載する。

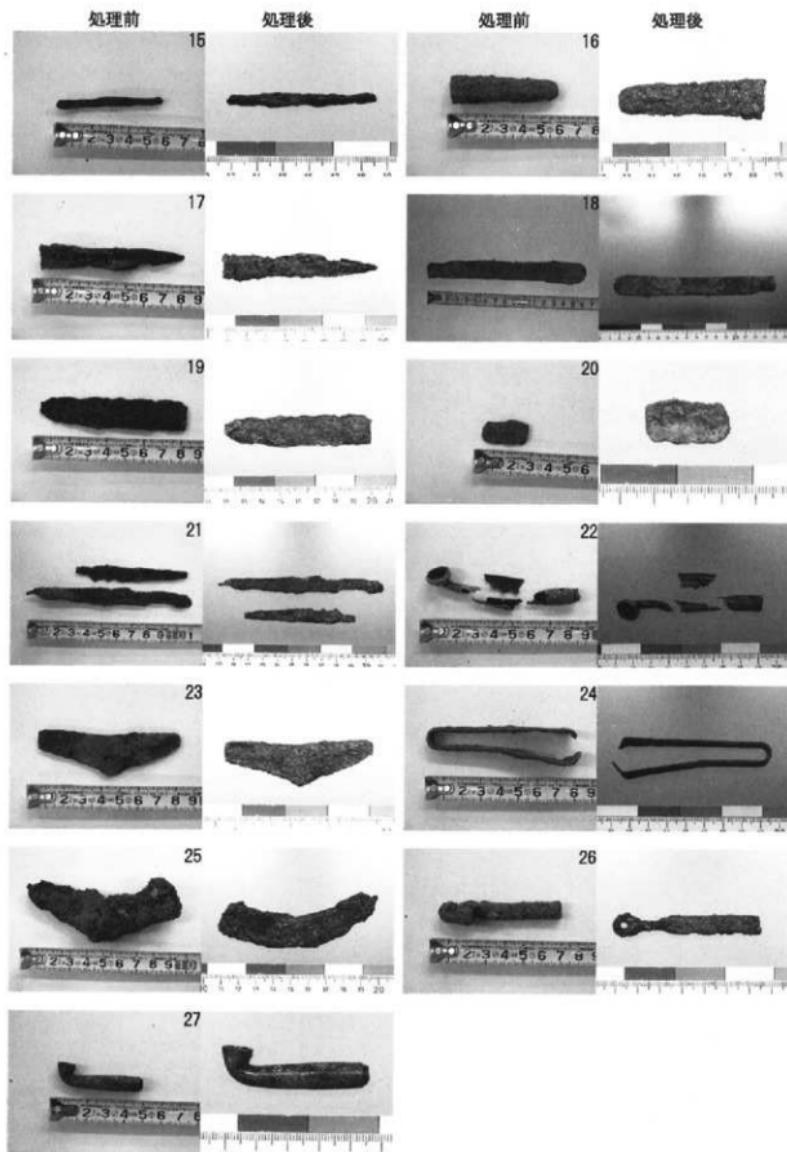
なお、処理前に器種不明とした8は「矢筈」、26は「鍵」の可能性がある旨、処理後に所見を得た。

No.	出土 遺跡	出 土 遺 構	器 種	金 属	長軸(mm)	短軸(mm)	径(厚さ)(mm)
1	FTB 3 区	SX5002	キセル雁首	銅	40	7	7
2	FTB 3 区	TP5002	キセル雁首	銅	60	11	11
3	FTB 5 区	SD10009	不明	銅	60	20	2
4	FTBB区	SD017	剃刀?	鉄	105	20	2
5	FTBB区	SD121	角釘	鉄	70	5	5
6	FTBB区	TR101	不明	銅	55	17	8
7	FTBB区	確認面	火鉄	鉄	140	13	5
8	FTB 5 区	SE10005	不明	銅	42	12	5
9	FTB 5 区	SK10117	不明	鉄	80	2	2
10	FTB 5 区	SK10230	不明	銅	80	10	1
11	FTB 5 区	SK10381	不明	銅	130	6	6
12	FTB 5 区	SK10427	キセル雁首	銅	60	10	10
13	FTB 5 区	SK10439	刀子	鉄	108	14	6
14	FTB 5 区	ST10018	角釘	鉄	130	10	10
15	FTB 9 区	SK1367	不明	鉄	60	5	5
16	FTB12区	SK2504	刀子?	鉄	60	15	8
17	FTB12区	ST2501カマド付近	刀子?	鉄	80	12	5
18	FTB22区	SX8003	不明	鉄?	160	20	7
19	FTBⅢ	SD38	刀子	鉄	83	18	3
20	FTBⅢ	SD46	不明	銅	25	13	2
21	FTBⅢ	SK63・64	剃刀?	鉄	115	15	5
22	FTBⅢ	SK63・64	キセル雁首	銅	70	10	10
23	FTBⅢ	SK64	飾り金具?	鉄	80	20	2
24	FTBIV	SD 7	毛抜き	鉄	85	10	2
25	FTBIV	SK20	不明	鉄	100	20	10
26	JONV	SI179	不明	鉄	65	8	5
27	JONV	SK202	キセル雁首	銅	45	8	8

※表中のFTBは双葉町遺跡、FTBⅢは双葉町遺跡第3次調査、FTBIVは双葉町遺跡第4次調査、JONVは城南町遺跡第5次調査の略号を示す。



保存処理写真 1



保存処理写真2

---

**山形市埋蔵文化財調査年報  
平成18年度**

2008年3月31日発行

発行 山形市教育委員会  
〒990-8540 山形市旅籠町二丁目3番25号  
tel023-641-1212

印刷 口口二一印刷(山形福祉工場)  
〒990-2322 山形市桜田南1-19  
tel023-641-1136

---

